

西村 義人

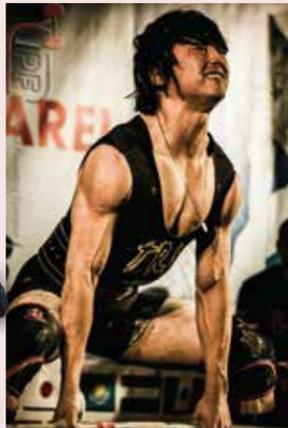
医学部医学科6年

NISHIMURA YOSHITO

研究、スポーツ、趣味、特技...
学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。
そんなきらりと光る学生を、
同じ学生の目線から紹介する。



▼デッドリフト270キロに成功



達成感が最大の魅力

1〜4年生47人が在籍している。主な活動は、週2回の合同練習、年2回の合宿、パワーリフティング大会へ出場など。
2012年の「第39回全日本学生パワーリフティング選手権大会」男子団体V10達成、14年の「第41回全日本学生パワーリフティング選手権大会」総合団体で準優勝している。



岡山大学 ウェイトリフティング部

※パワーリフティングとは...
バーベルを仰向けで持ち上げるベンチプレス、肩で背負って屈伸するスクワット、床から腰の高さまで持ち上げるデッドリフトの3種類の合計重量で勝敗を競うスポーツ。

現役医学生でありながら、日本記録を持つパワーリフティング競技者。西村義人さん（医学部医学科6年）は、全く違った二つの顔を持っている。

昨年11月にアメリカで開催された「第44回世界パワーリフティング選手権大会」。66キロ級で見事2位に輝いた。日本人が同大会で2位になるのは歴代4人目で、西村さんは最年少。これまでも数々の国際大会で優勝した経験があり、常に圧倒的な実力を見せてつけている。

競技を始めたのは、中学3年生の時。当時はバスケットボール部だったが、筋力トレーニングの一環で取り組んでいたベンチプレスの大会が地元であることを知り、力試しで参加。いきなり好記録を打ち出した。
大会関係者の勧めもあり、その後、パワーリフティング大会に出場するようになった。身近に指導者がおらず、インターネットの情報を参考にするなど、手探りで練習。自身でメニューを組みながら、着実に力をつけていった。「記録を更新できた時の達成感が最大の魅力。競技を通じて、たくさんの仲間ができたことも財産」と話す。



世界パワーリフティング選手権大会表彰式 準優勝▲



▲スクワット290キロに成功

勉学との両立

母親を食道がんで亡くしたのは小学6年生の時。卒業式の1週間前だった。一番寄り添っていた時期に母親といられなかった記憶から、医者に対してあまり良いイメージを持っていなかった。だが、進路を決める際に「医学を学ぶ道」を選んでいたのは、「母の病気が深層心理できっかけになっているのかもしれない」と語る。

自ら習得法を編み出し、自身を高めるというスタイルは、勉強でも同じだ。英語は中学から授業以外の時間も利用して、独学で習得。大学入学時には、TOEIC（990点満点）で985点という高得点をたたき出した。今年2月の医師国家試験前は、1日9〜10時間机に向かいながら、パワーリフティングの練習と両

立。限られた環境の中で、限られた時間をどう上手に使うかを常に意識している。

卒業後は、岡山大学病院で研修医として働く。興味のある分野は、リウマチや膠原病などの慢性疾患で、「二人の患者さんと長く付き添える医者でありたい」と考えている。昨年は、アメリカの医師国家試験にあたるUSMLEに合格。「アメリカの医学の優れた分野も学びにいきたい」と意欲的だ。

医師になっても競技は続けていく。2017年にポーランドで行われる国際的な総合競技大会「ワールドゲームズ」に出場することが目標だ。日本代表に選ばれるためには、国内外で一定以上の成績を残し続けなければならない。「研修が始まると、練習時間をつくるのが、今より難しくなるが、ベストを尽くしたい」と力を込める。
自らが自らを開拓し、そして超えていく。その信念はこれからも変わることはない。



▶学内で練習をする西村さん



インタビューー
岡大学生取材班
医学部保健学科 1年
谷部 麗華